

肺結節が見つかった時に知っておくべきこと



肺結節とは、周囲の正常な肺組織よりも密度が高い（厚い）肺の中の小さな領域です。

肺結節は、心臓病や骨折などの健康状態を調べるためのX線検査やスキャンで見つかることがよくあります。肺がん検診や肺の健康診断の一環として実施されるスキャンでも見つかることがあります。スキャンやX線では、肺の周囲の暗い、または黒い正常部分に対する白いまたは濁った斑点として映ることがあります。

多くの場合、肺結節があっても特に問題なく生活できます。ほとんどの結節は肺がんではなく、将来的に肺がんになることもありませんが、1つまたは複数の結節があることがわかったら、どのようなリスクがあり、次に何が行われるのかを知ることが重要です。

肺結節は成人においてかなりよく見られますが、症状が現れることはほとんどありません。成人の4人に1人、喫煙者では2人に1人が肺結節を患っている可能性があります。スキャンがより多く実施され、最新のスキャナーの画像では直径1~2 mmの結節まで確認することができるようになったため、肺結節を発見される人は増えています。

肺結節が見つかった場合、医師はそれに対してどう対応するかを決断しなくてはなりません。「がんではない」と、すぐに患者を安心させる場合もあれば、詳しく調べる必要があると判断する場合もあります。結節ががんである可能性があると医師が判断した場合、肺がんの診断が早いほど、治療が容易になり、より良い結果がもたらされます。

しかし、結節の約95%はがんではありません。

肺結節の原因としては、過去の感染症（結核への曝露を含む）、喫煙、その他肺の炎症を引き起こす可能性のある状態などが考えられます。肺結節には、小さな良性腫瘍によって生じるものもあります。

医師は何に注目するのでしょうか？

結節はすべて同じという訳ではありません。大きさ、形状、密度はさまざまです。

医師は、これらの特徴や、それらが時間の経過とともにどのように変化するかに基づいて、どの結節が無害であり、どの結節が肺がんである、あるいは将来的に肺がんになるリスクが高いかを可能な限り正確に判断します。また、結節の数や、肺の中でどの位置にあるかも考慮します。

・ 大きさ（直径および体積）

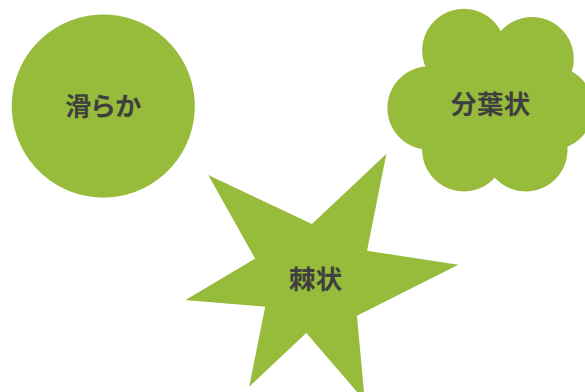
CTスキャン専門医（放射線科医）は、結節の直径や3次元的な大きさを正確に測定することができます。見つかった結節が小さい場合は、害のないもの（良性）である可能性が高くなります。それでも、特に肺がんのリスクが高いと考えられる場合は、結節が大きくなるか確認するために、医師がフォローアップスキャンで経過観察することがあります。すべての結節が大きくなる訳ではありません。

結節が大きい場合には、スキャンや生検などの検査を追加で行う必要が生じることがあります。

・ 形状（辺縁またはマージン）

結節の辺縁（正常な肺組織に接する部分）はマージンと呼ばれます。

辺縁が滑らかな、あるいは丸みを帯びている（分葉状）肺結節は、害のない可能性が高くなります。周囲の肺組織にまで伸びているかのような、辺縁が不均一または尖った（棘状の）結節は、さらなる検査が必要になる場合が多いです。



・ 密度/粘稠度

スキャンにより結節の密度を確認することができます。結節の中には、カルシウムを主成分とするため画像上で白く見え、過去の感染症が原因で生じたと考えられるものがあります。通常、このような石灰化結節は害のないものです。

多くの結節は、密度が低く固形部分がないため、灰色でぼんやりと見えます。このような結節は、すりガラス結節と呼ばれます。結節の一部が固形で、その周囲は密度が低くぼんやりしている場合もあります。これは半充実性結節（部分充実性結節、または亜充実性結節）と呼ばれ、より慎重な検査を要することがあります。

医師は、次に何をすべきかをどのように決定するのでしょうか？

医師は、CTスキャンに基づき、結節を低リスクから中程度および高リスクまで大まかに分類するガイドラインに従って判断します。

他に、年齢や喫煙歴などの要因も考慮して、結節ががんである全体的なリスクを算定します。患者自身の肺がん発症リスクの評価も、結節が見つかった場合の対応に影響します。

結節が低リスクグループに該当する場合は、フォローアップが不要になることもあります。リスクがやや高い場合は、変化がないか確認するために、数か月後に生検や追加のスキャンが必要になることがあります。医師が数年に渡って定期的なスキャンを行い、結節を経過観察することもあります。

結節のリスクが高いと考えられる場合は、直ちに追加の検査が必要になることがあります。

結節およびその原因は非常に多様であるため、ガイドラインは複雑で、さまざまな状況を想定したものになっています。結節が似たように見えても、対応は患者ごとに異なる場合があります。

医師は、あなたに対してどのプロセスを適用するのか、また今後いつ何が行われるかについてどのような選択肢があるのかを説明します。

よく分からないことがあれば、医師に詳しい説明を求め、症状についての不安を和らげましょう。

診察には、家族や信頼できる友人に付き添ってもらうことをお勧めします。質問する際や、医師の説明を覚えておく上で助けになります。診察中にメモを取ったり、許可を得て会話を録音したりしても構いません。

肺結節の治療は必要になりますか？

これは結節の原因によって異なります。医師は、結節が大きくなったり変化したりしていないかを確認するために、経過観察のみを行うことがあります。これをサーベイランスと呼びます。状態が安定していれば、治療の必要はない場合もあります。

医師は、結節ががんであることが分かっている場合や、がんの可能性が懸念される場合には、手術による結節の除去を勧めることがあります。

手術が適さない場合や手術を希望しない場合は、放射線療法でがん性肺結節を治療できる場合もあります。

医師はこれらの選択肢について説明し、リスクや負担を最小限に抑えた、最も適切な治療を勧めます。



GLOBAL LUNG CANCER
COALITION

肺結節が見つかった時に知っておくべきこと © Global Lung Cancer Coalition
www.lungcancercoalition.org

この情報リーフレットは、Global Lung Cancer Coalition (GLCC) 事務局により作成され、肺がんの専門家により検証済です。お住まいの国で利用できるサポートや情報サービスの詳細については、www.lungcancercoalition.org バージョン1 - 2024年11月をご覧ください。